

取組概要

2026 年 1 月 13 日

(あて先)
埼玉県立大学 学長

候補者 所属学科 社会福祉子ども
氏 名 相良 翔

私の取組は次のとおりです。

この度、学生投票によって道学教師理事長賞候補者に選出いただきましたことにつきまして、大変光栄に存じます。教育経験が必ずしも豊富とは言えないなかで本学に勤務するようになり、早くも 12 年目を迎えましたが、このように候補としてお名前を挙げていただけたことは、ひとえに学生のみなさま、そして日頃から支えてくださっている教職員のみなさまのおかげであると感じております。

私は、社会学を専門とし、司法福祉や更生保護、依存からの回復といった領域において、そこで生じる経験のリアリティについて研究してきました。こうした研究で扱ってきた事柄の 1 つである「困難を抱える人が経験を振り返り、意味づけ直していく過程」は、学修や進路、対人関係などに悩みを抱える現在の学生の姿とも重なる部分が多く、日々の教育実践にも生かすことができていると感じています。その上で、講義および日常的な学生対応を通じて、学生が安心して学び、自己を振り返りながら成長できる学修環境を形成し、学生の人格形成と学士としての専門性の基盤づくりにつなげることを意識してきました。

管見の限り、近年の学生は、学修面のみならず、進路選択や対人関係、将来への不安など、さまざまな困難を抱えながら大学生活を送っているように見受けられます。とりわけ社会福祉を学ぶ学生は、その内容を理解する過程で、自身の価値観や経験と向き合う場面も多く、そのなかで葛藤に直面しやすいこともあるのではないかと感じています。

こうした状況の中で、教員には知識の伝達にとどまらず、学生が自らの経験や考えを言語化し、学びとして位置づけ直すことを支える役割が求められていると考えてきました。ただし、特別な教育手法を用いてきたというよりは、授業資料の見直しや事前準備、授業当日の学生の様子の観察、学生からのリフレクションへの丁寧な応答、公平な評価、さらには自身の健康管理といった基本的な事項を大切にしながら、少しずつ自分なりに教育経験を積み重ねてきたのだと思いま

す。

以下では、科目責任者または科目担当者として関わっている代表的な科目について述べます。

「社会福祉専門演習（いわゆるゼミ）」および「卒業研究」では、少人数での議論や発表を通じて、学生が自分の関心や違和感を言葉にし、他者の視点に触れながら、理論的および実証的に考えを深めることを重視してきました。発言の正否を即座に評価するのではなく、「なぜそう考えたのか」「どの経験と結びついているのか」を問い返すことで、思考の過程そのものを振り返るよう促してきました。こうした取組により、学生が自ら考え、表現することへのハードルが下がり、主体的な学修参加が促されてきたのではないかと考えています。

「社会福祉の原理と政策Ⅰ」「司法福祉論」「福祉社会特講Ⅱ（医療と福祉の社会学）」などの講義科目においては、理念・制度・実践を抽象的に理解するだけでなく、それらが現実社会においてどのような意味を持つのかを、社会学および社会福祉学的な視点から考えられるようになることを重視してきました。また、学生自身の経験や身近な出来事と結びつけて考える問いかけを行い、学んだ内容を自分の言葉で捉え直す機会を設けてきました。その結果、学ぶことの面白さを実感してくれた学生が現れてくれたのではないかと受け止めています。

「ソーシャルワーク実習Ⅰ」では、実習に向かう学生が抱きやすい不安や戸惑いを前提とし、それらを否定せずに言語化できる場を大切にしてきました。実習前後の指導では、経験を単なる出来事として終わらせるのではなく、学生自身が何を感じ、何を学んだのかを整理し、実践知を身につけられるよう関わってきました。また、学生が実習経験を通じて自己理解を深め、次の学修につなげられるよう心がけてきました。

あわせて、「ソーシャルワーク演習Ⅲ」では、グループワークを主題とした演習を通じて、学生が他者との関係性の中で生じる力動や役割を意識しながら、自らの関わり方や支援の在り方について考えを深められるようにしてきました。また、「ソーシャルワーク演習Ⅳ」では、コミュニティワークを主題とした演習を行い、個人や集団を取り巻く地域や制度、資源との関係に目を向けながら、社会的課題を捉え、支援を構想する視点を養うことを重視してきました。

授業外においても、履修や進路、生活上の不安に関する相談に対し、可能な限り時間を確保し、学生の話を丁寧に聴く姿勢を意識してきました。特に、即時的な解決よりも、学生自身が状況を整理し、選択肢を考えることを大切にしてきました。今回、学生投票理由として寄せられたコメントにも、「聴く姿勢」について評価してもらえた表現が多く見られ、これまで意識してきた関わりが、わずかながらでも学生に届いていたのだと実感することができました。

もっとも、こうした実践は、特定の教員のみが担っているものではないと考えています。本学には、学生投票では見えにくいかたちで、日常的に学生の困難に向き合い、支援を続けている教職員の方々が数多くおられます。私自身の取組も、そうした方々の姿から学び、その蓄積の上に成り立っているものです。今回

の推薦は、個人の成果というよりも、教職員がともに培ってきた本学の教育文化の一端が、学生の声として表れたものだと受け止めています。

今後も、学生一人ひとりの状況や声に丁寧に耳を傾けながら、研究活動や大学運営上の業務を着実に遂行し、それらを教育実践と結びつけていきたいと考えています。そして、学生が学びやすい環境を整え、学生自身が自ら考え、選び、学び続ける力を身につけられるよう、教育内容と関わり方の双方を不断に見直していく所存です。